

# 古典鍼灸研究会会報

# 硯石

平成16年 2月15日発行

2004年

第340号



## 目次

附『針灸資生経』考略 ⑤

訳 秋山秀信… 1

症例報告

横山振一郎… 8

日本キリシタン史に残る偉大な漢方医

— 曲直瀬道三 — その一

井上雅文… 16

平成十六年一月例会報告

樋口陽一… 23

編集後記

… 26

## 日本キリシタン史に残る偉大な漢方医

井上 雅文

— 曲直瀬道三 — その一

※この稿は昭和四十八年十月〜四十九年六月までの間『チャペルニュース』立教学院諸聖徒礼拝堂発行に掲載されていたものを転載したものです。

明治二十八年二月六日、衆議院第八議會に於いて、「醫師免許規則改正法律案」は、漢方医家必死の運動にも拘らず、七十八対百五票の僅かに二十七票の差で否決され、千三百有余年間に及んだ漢方医術の医学的又文化的有効性は、唯政治的理由によって否定せられ民間療法の一つとしてのみ、その命脈を保ち現在に至っている。

医はその原初に於いては、術として出発したのであり、その発展過程に於いて、シャーマニズムの段階を経て来たのは、世界のどの地域に於いても確認出来る事実である。即ち、医と云う行為はその發生の時から、人間学的領域に属するものであり、肉と機能と

心の調和ある秩序の下に、一瞬たりとも止る事なく営まれる生命現象に根ざすものである。病が生命現象のマイナス面であっても、その時間性は否定せられない。

この様な病の流動性と時間性を把握し得る原理を持つものが漢方の医術である。それを漢方の専門用語で「証」と呼ぶ。通常、漢薬に於いては、「証」には薬剤の名、例えば、桂枝愈穴証とか小紫胡湯証とか云う名が附され、鍼術に於いては、肝虚証とか肺虚陽実証とか、臓腑と経絡の名が附されている。

「証」の発見によって、漢方の医術はその独自性と比類なき実証性、即ち時々刻々と移り変わる、病に対する適合性を獲得したのである。

日本の医学史上、漢方が医術として、その本来的使命を果たし得たのは、一人の優れた漢方臨床医の業績による処が大である。彼によって日本の医術はそれ迄の僧侶と一部の上流階級の医術から、庶民の医術へと発展し得たのであり、其処から医を専業とする医師が誕生したのである。

彼の名は曲直瀬道三、名は正慶（或いは正盛）、字は一溪、雖知苦齋、又盍静翁と号した。

西暦一五〇七年（永正四年）九月十八日、京都柳原に生まれ、そして一五九五年（文

祿四年）一月四日、八十九才で没した。その生涯は、戦国の真っ只中にあり、その間彼が接触した人物は正に戦国の諸大名及び一流の文化人達である。その名を挙げてみると、相国寺の僧盛都聞、彼の医学上の師、田代三喜、將軍足利義輝、細川晴元、松永弾正、三好修理、細川幽齋、正親町天皇、毛利元就一族、尼子義久、織田信長、明智光秀、豊臣秀吉、徳川家康、高山右近、黒田孝高、千利休、パードレ・オルガンチノ、パードレ・ベルシヨール、デ・フィゲレド等々である。道三は当時最高の教養を有す文化人であり、恐らくは、十六世紀に於いては、中国朝鮮半島を含んでも東洋随一の名医であり、医学者であったであろう。戦国の世にあつて、一廉の人物であれば、その時その時の権力の側に身を寄せねば生きられなかつた時に、何れの陣営にも出入りし、何れの側にも属すことなく、市井の一医師として、上下の隔てを越えて生き抜いた稀有の人物である。そして、彼は一五八四年（天正十二年）十二月、七十八才の時、京都南蛮寺に於いて洗礼を受け、キリシタンとなつたのである。

十六世紀の日本は、男の欲望と夢が天下統一を目指して、灼熱の如く燃え、日本の大部分の民衆がその渦中に巻き込まれて明日をも知れぬ運命に身を任せていた時代であつた。彼は権力に対して無欲、名声に対して恬澹であつた。だからこそ自由に生き続けら

れたのではないだろうか。一言にして言えば、彼はその生涯を平和主義者として、又求道者として生きたのである。漢方に於いては、医師をその内容に於いて三段階に位置づけている。

即ち、「病を治するは下工」、病気を治す事の出来る医者が一番下手な医者である。「人を治するは中工」、人を救う事の出来る医者は普通の医者である。最高の医者は「国を治するは上工」と呼び天下を治める医者である。

これから述べんとする道三は正に上工、国手に当る医者と云わねばならない。

#### 一、道三の洗礼

イエズス会日本年報、「一五八五年八月二十七日（天正十三年八月三日）付、長崎発パードレ・ルイス・フルイスよりイエズス会総会長に贈りたるもの」の中に次のような報告がある。

1. 「日本六十六ヶ国に在る医師のうち、最も優れた者が三人都在るが、この三人中第一位を占めるのは道三（ヨシミチ）と称する人である。」

優れた医師の中の他の二人は、施薬院全宗と竹田定加又は半井明英であると思われる。

施薬院全宗は、徳運軒と号し、一五二二年、江州（近江）に生れ丹波雅忠十七世の孫に当る。医を道三に学ぶ。後、秀吉の侍医となる。そして、秀吉によって復活された、朝廷の施薬院の実権者となる。禁裏と市中一切の医薬施療に最善の方策をたてた。これによって貴賤の別なく病めるもの凡て施療給薬に浴し、全宗の献身的努力は秀吉の善政ともなっている。一五九九年（慶長四年）十二月十日七十四才で逝った。墓は道三と同じ京都十念寺にある。

竹田定加は、伝不明、記録によれば、元龜二年、正親町天皇の痢病を治し、法眼の位を賜る。一五八一年（天正九年）官女の瘧（マラリア）を治して法印に叙せられている。半井明英は典薬頭を世襲していた家柄に生れ、中年以後、正親町天皇の信任を得、織田、豊臣の陣中に赴くこともあった。

優れた三人は、当時の京都の民衆及び諸大名、朝廷に於ける評判によってであろうから、道三、全宗、定加であったとするのが妥当であろう。

続いて、フロイスの報告を見ると。

2. 「この人は医術に於いて有名であるのみならず、他にも稀なる才能を有し、これによって日本の侯達より大いに尊敬せられ、いづこに行くも、常に第一の席を与えられる。

彼の顯著なる才芸のうち彼を優秀ならしむるものが三つある。第一は現代の最も雄弁な人であることで、その語るところは比喩と格言であり、大身達は彼と語ることを喜ぶのである。彼は都に八百人の門弟を有し或る者は雄弁術を学んだ。彼は治療において甚だ有名で、多年都に於いて公に医学を講じ、今も尚講義をしている。彼は年齢七十才を越えたが、血色よく、又天性賢明にして日常平静に規則正しい生活をなし、人と交って親切である。」

彼が主に何処で学んだかと云うことは、彼の主著「啓迪集」(この書については後に詳しく述べねばならない)の自序に次の様な記述がある。

「吾儕東<sub>ニ</sub>生縁於洛<sub>ニ</sub>而學<sub>ニ</sub>醫術<sub>ヲ</sub>於利陽<sub>ニ</sub>……」

即ち、彼は京都に生まれ、医術を足利学校に学んだと云うのである。しかのみならず、その前に、彼は生まれて数日にして両親を失い、伯母と姉に育てられ、八才で江州守山天光寺に入り、仏教の諸経を学び、十三才で当時の学問の中心であった、京都五山の一つ相国寺(臨濟宗)に移り、中国の文学、思想、即ち四書五経、三体詩、東坡、山谷等に接し、悉くこれらを暗誦したのである。足利学校に友肥後人、西友鷗と共に遊学したのが一五二八年(享祿元年)二十二才の時であった。三年間は正文伯に師事して深く中

国の経史、諸子の書を涉獵している。医学の師、田代三喜（古河の三喜）に会ったのが彼、二十五才、享祿四年であり、それは、彼の一生を左右し、日本の医学が一つの新しい時代を始めると云う全く運命的な出会いであった。

その後、師三喜が歿して（一五三七年）からも、医学及び経史を講究する事、合計十四年、漸く天文十四年（一五四五年）三十九才の時京都に帰った。翌年、環俗して医治を専らにし、將軍義輝の疾を治し、松永弾正、三好修理に厚く遇せられたのもこの頃である。洛下に後進を啓迪誘掖する為の学舎啓迪院を立て徒を集めて、医経を講じていた。その間前後二十余年に及んだ。義輝からは疾を治した功績により、富士如子と呼ばれる茶入れ（これは後に信長、秀吉、前田利家に渡って行く）、蓼冷汁（たでひやじる）と呼ばれる茶碗を贈られている。

つづく

## 日本キリシタン史に残る偉大な漢方医

### —— 曲直瀬道三 —— その二

井上 雅文

一五六三（永禄六）年初夏、道三は出雲国宍道湖の南、白潟（白方）の毛利陣中に入った。それは毛利元就の病、風痺（リュウマチ又は痛風）を治す為、將軍義輝の要請によるものであった。因みに、毛利家と義輝の交流は永禄三年正親町天皇踐祚の時、元就が穀一千石に相当する金銀を抛出し内裏を修復し、即位の式を行わしめた時に始まる。將軍義輝に対しても援助を惜しまなかった事は言う迄もなく、その後も（石見銀山を手中に収めてからは更に）朝廷及び將軍家に対する寄進に怠りなかったに違いない。

当時、毛利元就は中国地方を殆どその勢力下に制し、残るは元就生涯の大敵尼子氏を富田月山城周辺に捕らえ調略の最中であつた。

毛利の子攻めは長期に亘り、その陣（雲陣）は永禄九年十一月月山城の尼子義久以下が投降する迄、実に四年八ヶ月に及んだ。道三は元就の風痺を診治して後、毛利一族

から一層の信頼を得て、一度は京都へ戻ったにしろ、再び毛利陣中の洗合（又は洗骸、荒隈）宍道湖の東、松江の東南に滞在している。それは恐らくは永祿八年五月、將軍義輝が三好義継、松永久秀に殺された後の事であろう。道三は洗合に於いて、元就の懇願もあつたであろうが、学徒の為に「雲陣夜話」及び「雲陣夜話補遺秘伝」各一卷を著し、戦陣に起こる疾病の処方<sup>を</sup>詳しく述べている。そして、元就の懇望により「言上目録」（九ヶ条）と言う有名な一卷を遺している。それは、単に養生法に止まらず、政道の在り方武将の心得に迄及び、正に、ルイス・フロイスの報告にあるように大身達が進んで聞く事を喜ぶ比喩と格言<sup>に</sup>満ちている。一名諍諫九ヶ条と称されるものである。その最初の部分を引用すると、

「今度雲陣以来御家門繁栄御武軍長久祈念之外又無他故不顧忘（恐か）悼愚慮言上目録（この度、雲陣以来<sup>また</sup>、御家門の繁栄、御武運の長久、祈念のほか又他になく、故に恐悼を顧みず、愚言上目録を慮す）

一．怠勤之弁

二．飲食居所の儉約

三．歌舞之用捨

- 四、威徳宜ニ兼行一（威徳をよろしく兼行すべし）
- 五、兵戦莫レ好莫レ怠
- 六、貴ニ兼徳一嫌ニ偏信一
- 七、勉謙懈奢之異
- 八、親ニ賢智一遠ニ宝飾一
- 九、予ニ養生一予ニ防乱一

これ等の箇条一つ一つに解説（比喩と格言に相当するもの）が附されている。例えば第一箇条の「怠勤之弁」の解説の後半には「養生ノ書ニ曰 病ハ加リ干愈ルニ乱ハ起ル於治ヨリ。大鑑禪師ノ曰怠ハ衆生ノ病 勤ハ衆生ノ薬」（筆者注：説苑（漢の劉向著、二十卷）に病加ニ於少愈ニとある。大鑑禪師は唐代の禪僧、慧能と称す）

この意は病は癒りかけた時に重体になるように、禍は油断から起こる喩えである。

又第四箇条の「威徳宜ニ兼行一」には（書き下し文に改めると）「御武威天下無双の段は、其れ隠れなく候。然しるゆえんは山陰山陽皆御手に属し候。然しかりと雖も、下民御憐愍の文徳は未だ承り及ばざるなり、（注、道三の言）」

説苑に曰く

文有りて武無きは、以って下に威なし。武有って文無きは、民畏れて親しまず。文武俱に至り、威徳乃ち成る。

近年の名将は此の理を知らず、故に武威を以って、一旦国を取り民を得ると雖も、文徳足らず、故に世を長久に接するに、殷の湯、周の武の如くする能わず。(注、道三)

論語に曰く

徳は孤ならず、必ず憐有り。」

第五箇条の「兵戦好む莫かれ、怠ること莫れ」には次の引用がある。

「史記ニ曰ク

国雖レ大ハ好トキハ戦必ス亡ブ

天下雖平ト忘トキハ戦ヲ必ス危シ」

第六箇条「貴兼徳嫌偏信」には

「諸訴不レ可ニ偏ニ信一 晋ク問イ兼聴ハ則政法必可レ明也

新論ニ曰

君明ニ国治ストハ兼テ聴ケハ也

君闇ク国乱ストハ偏信也

臣範ニ曰

助レ君恤レ人者ハ至忠ノ遠謀也

損レ下養レ上者ハ人臣ノ浅慮也

(注、新論、桓譚かんだん新論(書名)。桓譚…後漢の人、字は君山、五經に通ず。偏信…一方のみを信ずること。兼聴…衆人の説を合わせ聞く事)

第八箇条「親ニ賢智一遠ニ宝飾一」には

「可い仰 賢者、可い親 智人、可い賞勇士、可い憐下民。当時ハ不レ然、信ズル讒ヲ貴レ妄、専ニス遊奥伎巧ヲ、事トス珍翫珠玉ヲ」。

言上目録の末尾には「永祿十年丁卯年二月九日 洛下雖知苦齋道三(花押)」とあり、宛て先は、毛利元就公、同輝元公、小早川隆景公、吉川元春公、相社元秋公(注、元就

の四男)

これを書く一年前、元就は陣中に瘧(おこり)を発し、元春以下諸将は元就の高齡の故に心配したが、道三の処方により治癒している。

再び日本年報を見ると

3. 「昨年府内のコレジヨの院長パードレ・ベルシヨール・デ・ファイゲイレド

Ichior de Figueiredo が重病に罹り、医師につき特に便宜があるので、治療のため都に赴いた。都に着いて病に苦しみ、右の医師に診察を請はんと欲したが、一つの困難があった。」

曲直瀬道三とキリシタン信仰との出会いは、道三らしく病にであるパードレを通してであった。

(附記、「言上目録」は山口県立図書館蔵の「雲陣茶話」と題されたものを用いた。表紙に国司弘昌本とあり、奥書に永田瀬兵衛より借り写置候云々とある)

つづく

日本キリシタン史に残る偉大な漢方医

井上 雅文

— 曲直瀬道三 — その三

ロイス・フロイスの「日本史」(柳谷武夫訳・東洋文庫)とイエズス会士「日本通信」、イエズス会「日本年報」(共に新異国叢書雄松堂書店)によって、パードレ・フイゲイレドの足跡を追ってみると。

一五三〇年頃(享禄三年) インドのゴアに生る。

一五五四年(天文二三年) 二四歳 モルッカ諸島のテルナテ島でイエズス会に入会す。

一五五八年(永禄元年) 二八歳 この頃迄、モルッカ諸島の布教に働き、その後日本に渡までゴアで修練長及び院長として布教に従事す。

一五六四年(永禄七年) 三四歳 七月六日(西洋暦日) マカオを出帆し、八月一四日 肥前(長崎県)の横瀬浦に着く。

(その間の航海の模様は次の如くであった。)

インドの管区長パードレ・アントニオ・デ・クワドロスの命により、日本の布教を援助する為、バルタザール・ダ・コスタ、ジョアン・カプラールの二人のパードレと共にペドロ・デ・アルメイダの帆船サンタ・クルス号で日本へ向かった。途中、暴風雨による浸水と沈没の危機、約四百人の乗組員のうち、三分の一が熱病に罹ると云う危難に遇いつつ、八月十四日夜横瀬浦に着いた。マカオ出帆後四十二日目であった。それは決して短い航海ではなかったであろう。というのは、彼らが出発する二日前にマカオを出帆したポルトガルの他の船、サンタ・カテリナ号は二十七日も早く平戸に着いていたからである。しかし、彼らはフロイスが書いている様に、予期していたよりも一月半も早く到着したのである。

同年、マリヤ御誕生日の祝日（九月八日）の七・八日後、パードレ・コスモ・ド・トルレスのいる有馬の口ノ津に向かう。

冬、豊後の府内（大分）に到る。

一五六五年（永禄八年）三五歳頃 十月福田港に在り。大村純忠布教を助く。

一五六六年（永禄九年）三六歳頃 三月、島原に在り。五月、口ノ津に在り。九月、

島原の会堂に派遣さる。同地に於いて、養方パウノ（*Yofu Paulo*）と共に

働く。フィゲイレドは一五六六年九月一三日付けの書翰の中で次の様に書いている。「予はこの会堂において堺の人パウロを伴侶とせり。年齢五十五歳の名譽ある人にして、人物よく日本の文字に精通し、妻ありしが我等の主キリストに仕えんことを熱望し、その意志を貫徹せんためパードレ・コスモ・デ・トルレスを訪ね来れり。彼は予を助けて異教徒を教え、また日曜日および他人を益せんとの大なる熱心をもって説教をなし、他に範を示し、デウスの僕となる希望を与え、大にこの地の教化事業に裨益せり。」

同年、豊後に駐在を命ぜらる。

一五六七年（永禄十年）三十七歳頃 九月臼杵に滞在す。

一五六九年（永禄一二年）三十九歳 二月、四旬節には府内に在り。府内、臼杵、井田を巡回布教す。大内輝弘に書を送る。

毛利元就と戦っている大友宗麟の戦勝を祈る。

この年、堺に会堂を建設する事をトルレスより命じられたが、天候堺に行く事を許されず。

八月二十八日、豊後より大村に到着。

一五七〇年（元龜元年）四十歳頃 復活祭をルイス・デ・アルメイダと共に過ごす。  
十月、福田港に行く。

一五七一年（元龜二年）四十一歳頃 大村で働く。（九月）

一五七五年（天正三年）四十五歳頃 十月福田港にあり。五島、平戸を経て博多に至る。

一五七七年（天正五年）四十七歳頃 博多に布教す。七十歳の養方パウロとパードレ・モイラと働く。フィゲイレド、石の病を發す。

一五七九年（天正七年）四十九歳頃 筑前に乱起こり、秋月に逃げる。

一五八〇年（天正八年）五十歳頃 府内に移る。コレジョ（大学）の院長に就任。

一五八二年（天正十年）五十二歳頃 （フロイスの「日本年報」によると）「コレジョの長なるパードレは老いて種々の病をもっているが、できるだけ周囲の地方を巡視し、キリシタンの告白を聴いている」とある。

一五八四年（天正十二年）五十四歳 病重く、治療の為、京に上る。（その時期は、恐らく十一月末、又は十二月の初旬頃の事であろう。）道三に診察を請わんとしたが、当時、道三は年齢を口実に治療を施す事をしていなかった。他の医師を勧めら

れたが、フィゲイレドは道三に診察してもらおう事を望んで止まず、ついに駕籠で道三の家に運ばれた。

此処で、フィゲイレドの病について考えてみると、七年前、彼が博多に滞在中、「石の病」を持っていた事が記述されている。「石の病」と云うのは、排尿時に小さい結石が出るところから名付けられた病で、インドでは日本の有史以前から知られて居り、現在の膀胱結石と考えられる。一五八二年には、「種々の病」を持って府内にあつたとすれば、フィゲイレドは、湿気と寒冷（彼は南洋の生まれであるので）又食物の変化（パードレ達にとって日本の食物に慣れる事は大変な努力が必要であつた。特に塩味の食事を多く取らされていた）、度重なる長期の旅、過労等によって腎臓を中心とする泌尿器病を持っていたのではないか。それによって腎石、尿管結石等の劇痛、血尿、発熱、悪寒等が併発していたに違いない。そして、恐らく「石の病」と診断したのは、フィゲイレドの同労者、府内の病院の医者、ルイス・デ・アルメイダ（彼は一五六六年に五島の領主、宇久純定の急性筋肉リウマチ？を治療して効果を挙げている。その時、尿の検査もしている。）又島原、博多でフィゲイレドと働いていた養方パウロであつたらう。そして、道三は、パウロが堺で漢方医として開業していた（永禄三年）頃、堺の商人達及

び三好一族等と交際があつたので、パウロはその当時から道三の名声を知っていて、パードレに推薦したのかも知れない。

フィゲイレドは道三に自分の病状を話した。「石の病」の事、それが永年に亘って身体を苦しめ、弱らせている事等。道三は脈を診し、漢方医術では、それ等は「疝病」である事、「石淋」と云う病であると云い、薬を処方して与えた。

4. 「パードレは己について語り、道三が薬を与えた後、兩人共老年であつた故、話は進み、生命の保存に資する保健薬を論じ、キリシタンの教えのことならば我等の勤行に及んだ。ここにおいて道三は己のことを述べ、予もまた身体の健康を計り、結婚してはいるけれども、清浄に暮らすこと十六年であると言つた。」

此の時、道三は七十八歳、フィゲイレドは五十四歳位、パードレの場合は老人と言えないかも知れないが、その当時、来日して亡くなつたパードレ達の平均寿命は五十八歳位である事を考えると、彼が老人と呼ばれるのも無理もないと思われる。パードレ・トルレスは五十歳の時、やはり老人と呼ばれている。この場合は道三が稀な長寿であると考

えるべきであろう。

湯液（漢方薬）の場合、臓府の病に処方する薬（又大部分の病を全機能的に把握して処方するので）には病状把握に対するだけでなく、常に保健薬となる。或いは、将来にする病に対する予防としての薬にもなるのである。それは未病を治すと言われるものである。

道三にとって、老いて保生を企つ事は無駄な事であった。彼の著書「啓迪集」には、「人レ待老テ而保生ス是猶ニ貧ノ而後蓄積ノ勤カ雖レ勤亦無レ益矣」とある。又養生する為には、老人にとって五つの事はタブーであるとされる。

「養生ノ五難」

名利不レ去爲ニ一難一

喜怒不レ除爲ニ二難一

声色不レ去爲ニ三難一

依味不絶爲ニ四難一

神慮精散爲ニ五難一

五者無ニ於胸中ニ則ハ不レ祈レ善而有レ福不レ求レ寿ヲ而自延フ也」

「声色」、音楽と色欲の事。

「依味」、食物の味が偏る事。

「神慮精散」、精神を勞し、体力を消耗する事。

道三にとって、延年益壽こそ老人の生き方であった。その為には名利名聲を求めず、食物に注意して、精神感情をコントロールし、無駄に勞さない事であった。道三には、パードレが世俗の欲から遠い生き方をしており、清廉である事は理解できた。しかし、老いても、かくも体を衰弱する程になっても、己の為にだけ延年益壽を望まないパードレの生き方に興味を持ったに違いない。

つづく

日本キリシタン史に残る偉大な漢方医

井上 雅文

— 曲直瀬道三 — その四

5. 「よってパードレはこの機会を捉えて彼らに語らんと欲し、医師は耳が遠かったので、耳に近く語り、靈魂の健康を得るためには一切の注意と努力とを用ふる必要があると言った。」

以下、ファイゲイレドと道三の間に次の様な問答が続いた。

道三「肉体の生命以外に人間残るものかあるうか」

ファイゲイレド「然り存在す。宇宙の上に永遠の命と光榮の源がある。即ち、創造主にして天地の絶対なる君主であり、靈魂はその恩恵によって永久に存し、その慈悲によって救わる。この本源は至上無限の智慧と慈悲とを有し、全宇宙と各被造物に存在・生命及び技能を与える。この宇宙の創造主を禪宗の説く如き物の本源、即ち物を生じ而る後

その物に化するものと考えてはならぬ。なぜなれば彼等の説く如く生命なく智慧もまた慈悲もなければ、自ら有せざるものを被造物に与えることは不可能である」

フィゲイレドが初めに道三に提示した事は、全ての宇宙の被造物は各々限られた運命が存在するのではなく、それ等は全宇宙の創造者である神の創造の御業の中にあつて絶えず栄光を与えられている事。全ての事物や人間は義務や宿命を負わされているとして悟ると言う様な虚無の存在ではなく、至上無限の智慧と慈悲の中に永久に存在するものであると言う事であつた。それは、道三にとって生命と靈魂の存在に対しての全く新しい意味を持つものであつた。

道三「予は日本の諸宗派に通じているが、全然満足せぬ故そのいづれにも服したことはない。併し自ら考えるところがあつて、それですませてきた。」

フィゲイレド「予が病はただ薬の事を考えたのみでは治す事はできぬ。医師にしてその教授である卿に倚頼し、指図に従わねばならぬ如く、(靈魂とその救いに関しては)卿の考えのみでは足らず、神学及び超自然の説教者又教授である我等に倚頼せねばならぬ。我等は人を救ふため特に派遣されて、数千レグワを距てた日本に来たのである。」

道三はこの比較に満足した様で、微笑し

道三「この高齡で今更新たに思考する必要があろうか。」

ファイゲイレド「卿は今終焉に近づいている故、従前より更に必要である。」

道三にとって無為恬澹こそ老人の無事養生の道であったので、言訳を考え

道三「予はすでに体力が十分でないので、遠く聖堂に行つて説教を聴く事はできぬ。」

ファイゲイレド「我等はこの事業に大いなる力を注ぎ、これが為、我等の国より遠く日本まで渡航し、当地においては多額の支出をなして自分を支え、日本人より補助を受けない。我等は困難と<sup>死</sup>瘴を冒し、予の如きはこの事業に尽くすこと最も少ない者であるが少年として日本に來り、今は卿の見らるる通り白頭となった。予は渡來した時は健全で元氣であつたが、始源又宇宙の君を愛する為、かくの如く病んで虚弱となった。我が同僚もかくの如き重要な事業の為、或いは老い、或いは死し、又衰弱しても依然日本の諸国にこの教えを弘めて止まぬ者もある。これは全く靈魂の救いに熱心な為である。それで、もし卿が我等の居る所に來ることが不能であれば、我等は大いに喜んで卿の居る所に來るべく、もし必要があれば我等は卿の家に逗留してデウスの教えを説くであらう。」

6. 「パードレは我等の主デウスが道三のためこの時を備へおき給うたことを覺つた。」

それは道理を説くごとくに、彼は一層の熱心と喜悅を示したからである。彼はまたすでに老いたる故、この教えの義務を尽くすこと叶はぬことを惧れると言ったので、パードレはこれに答え、我等の説くところの主は正義及び慈悲の源にして、被造物についてはその力以上のことを望み給はぬ。卿すでに老いたれば、少年よりも一層容易に、また困難少なく、主が我等に与え給うた戒を守ることができらうと言ひ、十戒を説いた。道三は彼が困難としたところに対するパードレの答えに満足し、その言う通りならば、悉く説教を聴くであらう故、パードレも又予が為に時を費やすことを喜ぶべきである。予は生来了解すること難い方ではないので、パードレは多く勞することはあるまい。而よく了解したらば、巖の如く強くこれを固守するであらうと言った。」

此処に於いて道三は全ての欲を脱して肉体を清廉に保つ事と無為にして精神を孤立せしめる事に加えて、心を積極的に律する修練を学んだのである。道三の驚くべき精神の柔軟さを示す一面である。

外出する事の少なかつた道三はそれから三日目に聖堂に行き説教を聞く約束をした。パードレ・オルガンチノとフィゲイレドに進物を用意して、約束通り道三は教会に來た。

脈をとって病人を診察し、「フィゲイレドに対する愛と彼に負うところの義務とにより無料で治療する」と申し出た。

道三に説教をしたのは、ヴィセンテ及びコスメと言う両日本人イルマンであった。ヴィセンテは養方パウロの息子で、ルイス・フロイスは「日本史」の中で彼について次の様に述べている。

「日本で入会した希有の才能ある人の一人で、言いまわし巧みに、雄弁な説教家であり、日本及びシナの文字の知識すこぶる豊富で、日本の諸宗旨、殊にすべての宗派の中で第一位を占めている禅宗の宗旨に精通していた。このイルマン・ヴィセンテはセミナリオの少年たちに諸学及び日本の諸宗旨の授業をするため、巡察使からみやこの諸地方へ派遣された」人物である。日本人イルマンの中では第一級の教養を持った説教者であった。

又イルマン・コスメは、一五六一年、京都の下京、四条の坊門、姥柳町に於いて、パードレ・ヴィレラから洗礼を受けている。その町からはその後二十年以上もキリシタンになった者がいなかったと記述される程、キリシタンに対する憎悪が続いた処である。コスメは一五八七年、細川忠興夫人（後の細川ガラシャ夫人）に教えを説き、彼女をキ

リシタンにならしめている。

偶然にも道三は良き説教者に出会ったと云えるであらう。

7. 「道三はその聴いたところを委しくその文字で認めたものを携えた。(彼は耳が遠かったので)説教をなす時には先ずその文字をもって認めたものを示し、予知せるが故に説くところを速やかにかつよく悟ることを得た。イルマン等の説教にはパードレ・オルガンチノが列席したが、道三は一人創造主があり、世界の支配者であること、また我等の靈魂の不滅なることをよく了解し、彼が文章を認めて持参した最初の観念はこれであった。イルマン・ヴィセンテは学者でありまた医師であったが、これを貰って都及び高槻のクリシタン等に示し、また堺のクリシタン等に送り、異教徒に示させた。蓋しその字句及び考え方が大いに光明を与えるものであったからである。我等の主ゼウス・キリストの托身受難及び昇天に關し、道三が認めてきた第三の観念にはまた大なる光明と感動があり、我等の主ゼウス・キリストにつきサン・パウロが述べた『我等は十字架に懸けられ、ユダヤ人には謎くものとなり、異教徒には愚なるものとするキリストを説く』という言葉と意味もほとんど同じであって、『異教徒は傲慢である故、ゼウス・キリス

トの受難の秘跡を嘲笑すべきが、予はこれをもってデウスの深くかつ高き御計ひであると考へる』と述べたのである。

その後、数日づつを置いて、第二日目には聖堂と聖像を拝せん事を願ひ、三日目にはデウスの教の書を拝せんといい、これ等の準備が終わって、彼は聖洗礼を受けん事を切に請うたので、パードレ・オルガンチノがこれを行ひ、洗礼名をフィゲイレドの名前から取って、ベルシヨール（Belchior）とつけた。

道三の改宗と洗礼を聞いたキリシタン達は大いに喜び、他の民衆も「智者道三がキリシタンとなった、これには理由がある事は確實であると言った。」

身分高く大いに思慮あるサンチヨ三箇殿は、

「キリスト教の信用の為には、道三がキリシタンとなった事は一万人の改宗よりも利益がある」といい、他の人達も又筑前殿（秀吉）がキリシタンとなったよりは、道三の改宗の方が勝れている、何故ならば日本の坊主及び異教徒の学者達は、筑前殿は愚人である故キリシタンになったと言うであろうが、道三は大学者でなる故、道三の力とひかりとによってキリシタンとなったと言明せざるを得ないだろうと噂した。

この事（道三の洗礼）は、一五八四年（天正十二年）の降誕祭の少し前に起こった事であるが、この報が小牧山の戦に参戦していた高山右近の処に達すると、右近はこの事を通して友人の大名数人にキリストの教を説き、彼等は戦争より帰って洗礼を受けた。そればかりではなく、この事は都中の評判となり、「都の異教徒等はこの改宗に驚き、異常なこととなし、聖堂に集った」り、「各地のキリシタン等はこの祝いのために集まり、諸人皆道三の改宗をもってデウスの大なる御慈悲と考へた」のである。

又この事は宮中にも聞え、つい先年迄、正親町天皇の脈を診て信任厚かった道三の改宗に、早速内裏より使いが道三の処へつかかわされた。そして「キリシタンの教は神（天皇家の神々）に敵対する教であり、神々を悪魔と称するので、その怒を招く教で、道三がその徒となる価値はないと言わしめた。」

「道三は思慮深くこれに答えて、キリシタンとなつて未だ時を経ぬ故、デウスの教に神々が悪魔と言ふことを聞いたことなし、神々は往時の人ならびに諸侯で、王ならびに日本の貴族の祖先であることは、パードレ等も知っている筈である。予が聞いたところでは、道徳ならびに正義の教である、と言つた。」のである。そして、この使者のことを聖堂のパードレ達へ伝え、説教者のイルマン等に忠告し、「（天皇家の神）神につい

ては死すべき人間として語り、その力また功德は救にも現世のことにも役立たないと言  
うに止め」るべきであると警しめたのである。

道三の改宗と洗礼は内外に非常な影響を呼んだのであるが、京都地方のキリシタン達  
はこの時ばかりは肩身の狭い思いをしないですんだ事であろう。

かくして京畿地方の教会はクリスマスを前に素晴らしい贈物を神に献げる事が出来た  
のである。

(付記、「石の病」については、小学館の齊藤豊氏に種々調べて頂いた)

つづく